

琵琶湖北湖沿岸域におけるスジエビの稚エビの分布

大前信輔

1. 目的

スジエビは琵琶湖漁業において重要な水産資源である。その稚エビの多寡は漁況に大きく影響すると思われる、毎年の稚エビの加入状況を評価することが求められる。これまでの研究により、着底直後と思われる稚エビは主に7~8月の水深10mの水域に分布することが明らかになった。そこで、北湖全域における稚エビの加入状況を把握することを目的として稚エビの生息状況調査を行った。

2. 方法

調査は2024年の6月から8月にかけて月1回の頻度で、琵琶湖北湖の10か所（高島市海津地先、針江地先および大溝地先、大津市比良地先、野洲市菖蒲地先、近江八幡市長命寺地先、彦根市薩摩地先および松原地先、長浜市長浜地先および尾上地先）の水深10m地点で行った。調査はそりネットを用い、曳網距離は約50m、曳網速度は約1.5 km/hとした。採捕したサンプルは現場にて10%ホルマリンで固定して試験場に持ち帰った。頭胸甲長が概ね3 mmまでのスジエビを稚エビとして計数した。曳網距離に開口幅（50 cm）を乗じて曳網面積を算出し、稚エビの生息密度を求めた。

3. 結果

稚エビの生息密度を図に示す。6月に稚エビが採捕されたのは針江地先、薩摩地先、松原地先、長浜地先および尾上地先の5地点のみで、その平均生息密度は1尾/m²以下であった。7月になると全地点で採捕され、平均生息密度は60.9尾/m²に増加した。比良地先と松原地先における生息密度は100尾/m²を上回った。8月の平均生息密度は65.5尾/m²で7月と同程度であったが、海津地先、針江地先、

大溝地先、比良地先、薩摩地先、松原地先および尾上地先の7地点で7月に比べて減少した。長命寺地先の生息密度は200尾/m²を上回った。

稚エビの出現状況は地点により異なった。海津地先、大溝地先、薩摩地先、松原地先および尾上地先のように生息密度が7月と8月であまり差がみられない地点もあれば、針江地先、比良地先および長命寺地先のように両月間で5倍以上異なる地点もあった。

今後、データの蓄積を図り、生息密度の年変動と漁獲量の年変動との関係を調べる予定である。

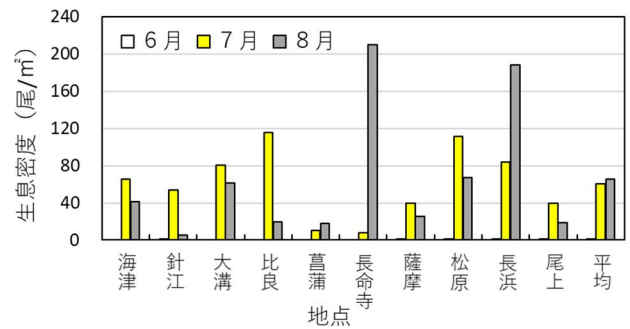


図 地点別月別の稚エビの生息密度